

## ブリコラージュとしての伝統医学

藤 山 正二郎

**要旨：**先に私は「野生の思考としての伝統医学」という論文を書いた。その要旨は、漢方などの伝統医学は近代医学とは異なる科学的認識で成立している、いわばレヴィ＝ストロースの言葉の「具体の科学」として伝統医学を展開することであった。さらに本論ではレヴィ＝ストロースの『野生の思考』の「感性的表現による感覚界の思弁的な組織化と活用をもとにしてなした自然についての発見」を基本として、第1章の「具体の科学」のなかの「ブリコラージュ」「神話的思考」の概念を消化して、漢方、中医学、ウイグル医学という私が多少とも関わった伝統医学の理解に応用したいと考えている。

「具体の科学」とは遅れている科学ではない。近代医学は部分的に伝統的な処方薬などの分析を行い、伝統医学の効能を認めつつある。分析とは近代の科学的方法の一つである。それによって、この二つの科学のコミュニケーションが部分的には可能であろう。しかし、その背後にある身体観、自然観などを理解可能なものにししないと、伝統医学は科学ではなく、哲学、思想にとどまってしまう。そうしないためにも、この二つの科学的認識を対照させながら、相互にその認識の特徴を明らかにしたい。

ブリコラージュとは、「ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作ること」である。「器用仕事」とか訳されているがいま一つしっくりこない。ブリコラージュでは資材の世界は閉じている。すなわち、そのときそのとき限られた道具と材料の集合で何とかするというのがここでのゲームの規則である。身体はそれを包む環境とのバランスのとれた相互作用のなかにある。いわば閉じた世界である。それを対象とする医療はブリコラージュ的であるべきであろう。環境の変化によって、新しい病気などは出現するが、基本的には身体は静態的均衡になかにある。具体の科学の知識の工作面を示すのがブリコラージュであるが、伝統医学は自然の「ありあわせ」の植物や動物などを薬として使用する。

近代医学は身体概念を拡大していく。人間機械論から、臓器移植、再生医療など、身体を人間本来のものから絶えずはみ出してきた。さらに科学的概念を駆使して、合成された新薬を絶えず開発した。このように近代医学は無限に拡大可能な科学的概念を使用する。

伝統医学は身体的記号 (embodied symbol) を使う。脈状、舌の形状、色など言語化しにくい記号で判断する。陰陽五行説も基本は身体的メタファーである。患者を前にして、これらのシンボルをブリコラージュ的に組合せ、構造的な処方を出すのである。

**キーワード：**伝統医学、漢方、野生の思考、ブリコラージュ、近代医学

## 1. ブリコラージュと神話的思索

具体の科学の知的面は神話的思索であるが、神話的思索といってもこれから説明するように、非科学的というような意味ではなく、具体の科学の論理的思考方法である。「神話的思索の諸要素はつねに知覚と概念との中間に位置する。知覚内容をその生じた具体的状況から抜き出すことは不可能である。知覚は比喩（心像、イマージュ、イメージ）でもある。その間に記号が存在する。心像も記号も一つの具体的存在である。しかし、それは指示能力をもつことで概念に似ている。記号も概念も、それ自体に限られず、自己以外のものの代わりになることができる。概念はこの点で無限の容量を持っているが、記号の容量は有限である。」<sup>(1)</sup>

「イメージは具体的であらゆる直接表象で働いている。一度も見たことのない一角獣、架空の物語人物などをまざまざと思い描くこともできる。ところが物の類を示す“概念”はある種の普遍性を備えている。この兩者をつなぐものをレヴィ＝ストロースは、“記号”だとした。ソシュールに倣えば、イメージがシニフィアン（意味するもの）であり、概念がシニフィエ（意味されるもの）である。科学者が概念を用いるのに対して、ブリコラージュでは記号で作業を進める」<sup>(2)</sup>

概念には内包（概念が適用される事物に共通な性質の集合、医学という概念の内包は病気の研究など）と外延（概念が適用される事物の集合、たとえば医学という概念の外延は外科、内科、眼科など）があるが、記号には相互に置き換え可能な配置と継起の関係しかない。目的と手段、意味するものと意味されるものの位置を変えていく。要するに科学的概念は限界がない

ということである。際限なく発展する性質を持っている。

① 神話的思索は自然界から知覚と、それを繋ぐ概念を媒介する過程である。「神話的思索はブリコラージュの一つの形式であり、言語を使って構造体を作り上げる。過去の社会的言説の残骸を用いて作り上げる」<sup>(3)</sup> それは知覚と概念との中間に位置するので、先に述べたように、それは「記号」ということになる。記号と言ってもソシュールの静的な記号ではなく、意味するものと意味されるものとの相互作用によって、動的に構造化される記号である。記号はシンボルに意味に近く、独自の用法で使われている。

② 「記号と概念の対立点のうち少なくとも一つは、概念が現実に対して全的に透明であろうとするのに対し、記号の方はこの現実の中に人間性がある厚みをもって入り込んでくることを容認し、さらにはそれを要求することさえある」<sup>(4)</sup> 人間性というのは「人間の身体は、具体的なモノとして具体的世界の只中にあると同時に、それが知覚と概念の相互作用を再生産しつつ、そのなかでのみ運動し続ける」<sup>(5)</sup> ということであろうか。

③ 概念は無限の容量を持つのに対して、記号は有限である。それは身体性をもつという意味で限界がある。

身体的記号論といえばジョンソンとレイコフのイメージ図式と関係してくるだろう。

われわれはたえず何らかの経験をしているが、これら無数の経験に一定のパターンがなければ、われわれは経験を理解できないだろう。イメージ図式は経験にそうしたパターンをもたらすものである。われわれの経験は、身体と対象との相互作用から生まれたこのようなパター

ンが繰り返し現れることによって構造化され、それゆえ理解可能なものとなる。

したがってイメージ図式は、身体的経験を基礎にしている。しかし、この経験そのものではなく、経験に繰り返し現れるパターンであるので、経験（知覚やイメージ）よりも抽象的・一般的な構造である。イメージ図式は、ある種の運動感覚的性格をもっている。この点で、イメージ図式は共感覚的であるということもできるだろう。イメージ図式はイメージや知覚よりは抽象的であるが、しかしその一方で、概念よりは抽象度の低い表象である。イメージ図式はこのように中間的な次元を占めるゆえに、概念とイメージを媒介することができる。

この意味でもイメージ図式は前述した身体的記号と類似している。例としてバランス図式と内一外図式を説明する。バランス図式は伝統医学の理解のうえでも重要であろう。内一外図式は後に説明する漢方の身体の「表裏」とも関係する。

バランス図式は、身体的に知られるバランスの経験を基礎にしている。われわれは、誰でもふだんそれと気づきはしないが、直立した姿勢のバランスとはどういうものかを知っている。また、身体という極めて複雑な体系内部のさまざまなバランス、あるいはバランスの喪失を経験している（手が冷たすぎる、胃に食物が多すぎる、口が乾いているなど）。こうしたバランスを保つという行為と身体内部の体系的過程の経験を通じて、バランスのイメージ図式が生み出される。

〈内一外〉図式の基盤は、物理的なあるものが他の物理的なもの（容器）の内部にあるという、包含の原初的な経験である。われわれは日常生活のなかで、このような〈容器〉から出入

りをするという経験を無数に繰り返している。チューブから歯磨きを出し、歯ブラシを口に入れて歯を磨く。朝食を口に入れ、家を出る。こうした経験の繰り返しの中から、あるパターンが生じてくる。これが〈内一外〉図式である。さらには、このパターンを用いて他の（物理的でない、抽象的な）領域の経験も理解されるようになる。心理状態、集団、出来事、議論などもこのパターンにしたがって構造化される。こうして、「中に」、「外に」という言葉の意味は、物理的対象の領域のみならず抽象的対象の領域においても、図式による経験の構造化を基礎にしていると考えられるのである。

この点はイメージ図式の「隠喩的投射」という概念装置を用いて説明できる。イメージ図式の隠喩的投射とは、源泉領域（通常は物理的経験の領域）の構造を、標的領域（抽象的、概念的経験の領域）に隠喩的に投射することである。「隠喩的」とは、源泉領域から、それとは種類を異にする標的領域へと投射されることを指している。<sup>(6)</sup>

このイメージ図式は陰陽五行説を理解するのに役に立つ。陰陽の二元論にしても五行説にしても、身体の隠喩的投射と考えればよい。源泉領域は手や脚は二つ、指は五つという身体であり、それが陰陽や木火土金水などの抽象的、概念的経験の領域に隠喩的に投射されている。イメージ図式も「記号」と同じ性質をもっている。

## 2. 伝統医学と近代医学の言語（ランゲージ）

近代医学は、イメージと概念の関係からいえば、ほとんど概念に近い記号から成り立っている。近代医学について「意味するもの」である諸症状と、「意味される」病気との関係、記述

とそれが記述する内容との関係、損傷とそれが示す疾患との関係、なども同じ関係である。臨床医学の真の重要性は、次の点にある。病気に関する言語（ランゲージ）の可能性自体の再編成であるという点である。フーコーはこのように述べ、第6章、徴候（シーニュ）と症例<sup>(7)</sup>、で詳細に展開している。

医学は、ことの性質の許すかぎり、この学問を視覚的なものとなすべきである、と規定した。ルネッサンス以来、医学はたった一つの知覚野、まなざしの行使のみの上に築こうとした最初の試みであろう。まなざしと、見られた対象とが、互いに正面に向かい合って、それぞれの位置をその中に発見するような、そういう共通な構造として、病の可視性を仮定するのである。<sup>(8)</sup>

徴候の言語学的構造において、「意味するもの」(徴候と症状)の理解可能な構文のなかで「意味されたもの」(病の中心)が完全に述べつくされてしまう。症状は疾患の唯一の本性であり、症状(徴候)が「意味するもの」であるとき、それは「意味されるもの」にもなる。臨床医学において、見られることと語られることは、病気の明白な真実において相通じるのである。病気の全実体はまさにそこにあるからである。病気は見えるものの要素の中にしか存在せず、したがって、言いあらわしうるものの要素の中にしか存在しない。「意味するもの」は「意味されるもの」であり、完全に結びついている。<sup>(9)</sup>

西洋近代医学における大きな切れ目は、まさに臨床医学的経験が、解剖＝臨床医学的まなざしと化したときからはじまる。病理解剖学によって損傷部分があきらかにされ、そのみが、徴候として語られる。身体について、医療

について、病気について、薬、治療法など概念を用いて、近代医学は新しいものを作り出し、際限なき発展をする。人間機械論の身体観によって、臓器移植、再生医療など新しい治療法を生み出した。一方で辞書的な、静的な意味するものと、意味されるものとの関係によって、病名、病因、臓器的な位置、薬などの治療法などが固定されている。

しかし、自然的な均衡をもつ人間の身体に、際限なき発展する科学的概念を適用してよいのだろうか。医学は身体という有限の世界を対象としている。それならばそれはプリコラージュ的思考になるべきであろう。伝統医学はプリコラージュ的に記号(シンボル)を用いることになる。概念は無限に増殖する。プリコラージュではその集合を組みかえる操作媒体であって、集合を大きくもしなければ更新もせず、ただそれの変換群を獲得するだけにとどまる。

伝統医学は知覚、比喩、心像(イメージ)に近いが、近代医学は概念によって構成されている。心像と概念はそれぞれ「能記」(意味するもの)と「所記」(意味されるもの)の役割を演ずる。レヴィ＝ストロースは比喩の使用によって成立する神話的思考・具体的思考の記号学的基础づけを行っている。記号(サイン)ではなくシンボルと考えると理解しやすい。

漢方の背景にある陰陽五行説に同じようなシンボル群が働いている。陰陽学説は宇宙間一切の事物がすべて陰陽の二項対立にあるとする説である。地と天、夜と昼、秋冬と春夏、女と男、寒と熱、重と軽、内向と外向、静止と運動などである。対立しながら統一している。世界の異なる範疇をつなげ、世界を何段にも重ねられた対立の連続体と認識している。

陰陽説から五行説へどのように移行するか。

五行学説とは、自然界に存在するあらゆる物が木、火、土、金、水の要素から構成されていると考え、この五つの間に存在する法則に従って、自然界のあらゆるものが運動していると考えられる説である。この要素もそうであるが実体としてではなくメタファーとしてとらえるべきであろう。陰陽に基づいて天と地がある。天には太陽があり陽気が降り注ぎ、地からは寒、冷などの陰気が昇る。その陽気と陰気が交わってつくられたところがわれわれの住む自然界である。さらに天の動きとともに春夏秋冬という季節が生まれる。五行では夏と秋の間に長夏を入れてある。日本では土用の季節にあたるものだが、とくに重要な夏から秋にかけての変化の季節である。春は生、夏には長、長夏には化、秋は収、冬は蔵という変化の作用に名をつけた。また、風暑湿燥寒がこの季節と木火土金水と対応する。<sup>(10)</sup>

漢方も基本的には二元論が基礎にある。「虚則補之、実則瀉之」、つまり、あるべきものが不足している場合（虚証）はそれを補えばよい、あってはならないものがある場合（実証）はそれを排除（瀉）すればよい。「証」とは個々の患者を診断して立てた仮説である。気虚があれば補気、血虚なら補血、陰虚なら補陰、陽虚なら補陽をする。熱証と診たら清熱法、痰飲があると診たら祛痰法、瘀血があると診たら活血法である。<sup>(11)</sup>

実際の症例分析でも、第一段階の症例分析では病は表（体の表面）か裏（体の内部）を診る。悪寒と発熱があるので表証と診断する。次に表熱証なのか表寒証なのかを診る。無汗なので表寒証の可能性が高い。第二段階では時間的経過と共に、四日たっても治癒しないので、①表裏を弁別する。脈数などで病邪が裏に入ったと考

える。②寒熱を弁別する。熱は高く悪寒はないので熱証に転化したと推定する。③虚実を弁別する。体がだるいなどの症状が見られないので、熱実証と判断する。④臟腑を弁別する。咳や痰が見られるので肺の疾患とする。簡単いえば熱証なので清熱剤を処方することになる。<sup>(12)</sup>

このように伝統医学ではシンボル、記号、メタファーを組みかえるだけである。それは徴候・症状から判断される。サーズやエイズのように新しいウィルスが引き起こした病気でも、伝統医学は抗ウィルスや新薬やワクチンを開発することはしない。サーズが中国で流行した時も高熱の症状がでる、それを除去するため中医学の伝統的な処方はある程度の効果はあったといわれている。可視的なウィルスや細菌を発見して、それを攻撃するという方法はとらない。高熱はすなわちサーズのウィルスが原因というように、意味するものと意味されるものとの直接的な結びつきではなく、伝統医学は高熱という症状は上記のように表裏、寒熱、虚実などの記号の弁別によって判断され、病名という概念には結びつかない。

イメージは固定しており、それに伴う意識の行為と一義的に結合している。ところが記号ならびに能記となったイメージは、概念のように同型の他の存在との間に同時的で理論上無限の関係の作り出しはしないけれども、すでに置換可能である。神話的思考は、イメージ（比喩）に足をとられてはいても、すでに一般化能力を持つものであり、したがって科学的でありうるということである。<sup>(13)</sup>

神話や儀礼は、しばしば主張されたように、現実に背を向けた「架構機能」の作り出したものではなくて、それらの主要な価値は、かつてある種のタイプの発見にぴったり適合していた

(そしておそらく現在もおお適合している) 観察と思索の諸様式のなごりを現在まで保存していることである。ある種のタイプの発見とは、「感性的表現による感覚界の思弁的な組織化と活用をもとにしてなした自然についての発見」である。<sup>(14)</sup>

神話は自然現象を解明しようとしたのではなく、自然現象は現実—それ自体が自然界ではなく論理に属する種類の現実—を神話で説明するための手段である。

上記のことを具体的に説明しよう。ムルンギン族は蛇を、年々洪水を引き起こす雨季と結び付けている。約半年は乾季であり、集団生活は再開され、豊かさがみなぎる。季節や風が両半族の間で分割され、神話的に蛇は雨季に、神話的な姉妹は乾季にむすびつけられる。男性はイニシエーションを受けたものの代表者を、女性は受けないものの代表者であり、生命が存在するためには両者の協力が必要である。神話体系とそれが用いる表現形式は、自然条件と社会条件との間に相同関係を立てるのに役立つ。地理、気象、動物、植物、技術、経済、社会、儀礼、哲学などいくつもの面に見出される優位の対照の間の対応法則を明らかにするのに役立つ。<sup>(15)</sup>

このように神話的記号、シンボルを使用しても科学的でありうるということである。

### 3. 感覚的なものの論理

最初、人間は、感覚に直接与えられるもの(感覚与件)のレベルでの体系化という最も困難な問題にとり組んだのである。<sup>(16)</sup> レヴィ＝ストロースの『野生の思考』、『神話論理』の目的は、さまざまな感覚的なものに論理があること、そして感覚的なものの過程を跡づけ、感

覚的なものに法則があるのを証明することである。

伝統医学の歴史を遡ると、「野生の思考」の第一章の初めの部分と重なるところが出てくる。技術の起源を説明するのに、森林の自然発火をみて火の使用を知ったとか、火をたいたあとの土が堅くなるのを気づいて陶器を発明したとかよくいわれる。しかし、このような発明は偶然の経験の積み重ねでは困難である。知恵のある者(知者)、もしくは「文化英雄」が登場しなければならない。

土器、織布、農耕、動物の家畜化という、文明を作る重要な諸技術を人類がものにしたのは新石器時代である。今日ではもはや、これらの偉大な成果が偶然の発見の偶然の集積であると考え、ある種の自然現象を受動的に見ているだけで見つかったものだとする人はあるまい。銅を手に入れるには、銅鉱石が何かのはずみで火中に入ったとしてもなにも起こらない。銅鉱石を粉にして、焼き物の器にいれ、ふたをして強熱することが考えられる最も簡単な方法である。当然、その熱に耐える焼き物が必要になってくる。<sup>(17)</sup>

医学のはじまりに話を移すと、紀元前120年頃、神農の説話に次のようにある。「むかし、人びとは草を食らい、水を飲み、樹木の実をとり、貝を食べ、病にかかったり毒や傷をうけたりすることが多かった。そこに神農がはじめて人びとに五穀をまかせ、土地の乾湿、高低、肥えているか痩せているかを見定めた。神農は一日に70回も毒に出くわしたのである。<sup>(18)</sup>

これから医学の起源神話が派生してくる。神農氏は草木を嘗めて味をかみしめ、薬を広め、病を治し、若死にする人びとの命を救った。神農とおなじく医学の始祖とみなされている黄帝

にも説話がある。黄帝はその臣である岐伯にもろもろの薬を嘗めて味をかみしめさせ、医術をつかさどり、病を治させた。<sup>(19)</sup> このように味覚を駆使して薬を発見している。これは現代の生薬の事典にも受け継がれ、すべての生薬の味覚が記載されている。ただ、この味覚が生薬の分類、効能にどのように反映されているかは不明である。「漢方にも良い場合があるけれども証をみなければなりません。ちょっとなめてもらって、苦いなかにもかすかに甘みがあるのはだいたいあっている。舌が逆毛立つようで飲めたものではない、というのは証に合わない。」<sup>(20)</sup>

『野生の思考』の第一章の具体の科学にも、自然環境にたいする感覚でもって微細な差異まで区別する精密さを記述している。「ネグリトは、自分の暮らしている環境に完全にとけこんでいる。何という植物かははっきりわからないと、その実の味を調べ、薬の匂いを嗅ぎ、茎を折って観察し、生えている場所を検討する。」<sup>(21)</sup> また、薬用植物、有毒植物に関心が深い。「葉や茎が苦味をもっている植物は、フィリピンではひろく胃病の薬に用いられている。同じ性質を持つ植物がもち込まれると、それはみなすぐ実験される。」<sup>(22)</sup> シベリアに住む諸部族が、薬用に用いる自然物に与える明確な定義とそれに認めている特効は細部への注意、弁別への配慮を示す好例である。

真の問題は、キツツキの口に触れれば歯痛がなおるかどうかではなくて、何らかの観点からキツツキの嘴と人間の歯を『いっしょにする』ことができるかどうか（病気の治療はこの一致のさまざまな仮定的応用例のうちの一つにすぎない）、またこのように物と人間をまとめることによって世界に一つの秩序を導入するきっかけができるかどうかを知ることである。<sup>(23)</sup> 現代

の化学によれば、多種多様な味と香りは、炭素、水素、酸素、硫黄、窒素の五元素のさまざまな結合で説明される。玉ねぎ、にんにく、キャベツ、大根、からはユリ科とアブラナ科にわかれる。それを一まとめにさせようとするのは直感だけだろう。化学はどちらも硫黄を含んでいることで、この感性が正しいことを証明する。美的感覚が、他の手段の助けをかりないで分類学に道を開き、さらにその結果のうちのあるものを先取りすることもありうる。<sup>(24)</sup>

毒性をもった種子や根を食品に変える技術、逆にその毒性を狩猟や戦闘や儀礼に利用する技術、そして病気を治療する薬として使用する技術、ながい時間を要するこれらの複雑な技術を作り上げるのは、本当に科学的な精神態度であり、知る喜びのため知ろうとする知識欲である。その知識が実用性、有効性を持つのはごく一部であろう。だから、最初から実用性を求めて技術を作り上げるのでは、すぐ挫折してしまう。<sup>(25)</sup>

科学的思考には二つの様式が区別される。それらは人間精神の発達段階の違いに対応するものではなく、科学的認識が自然を攻略する際の作戦上のレベルの違いに依ずるものである。新石器時代の科学であれ近代の科学であれ、あらゆる科学の対象である必然的関係に到達する経路が、感覚的直感に近い道とそれから離れた道と二つある。<sup>(26)</sup>

分類はいかなるものでも渾沌にまざる。感覚的特性のレベルでの分類であっても、それは合理的秩序への一段階である。感覚的性質と内在的特性の必然的な関係はなににしても少なくとも多くの場合には事実上の関係が存在する。この関係を一般化することは、合理的根拠がなくても、非常に長い期間にわたって理論的にも実際

的にも有効な操作でありうる。舌を刺し苦い味をもつ汁液がすべて毒であるわけではない。ところが美的感情にとって同等とみなしうるものは同一の客観的現実に対応するとしておくことは、思考においても行動においても有利である。両者のあいだの関係がそれ自体感知しうるものである（歯の形をした種子は蛇にかまれるのを防止するとか、黄色の汁液は胆嚢の病気にきくとか）としておくことは、仮のものにせよ、どのような関連性にも無関心であるよりましである。分類は、たとえ奇妙で手前勝手なものであっても、豊富で多様な事項の全容を保存する。それは「記憶」の構成を助けるのである。<sup>(27)</sup>

感覚的なものの優位、それを記憶しやすい、論理的に組み立てるため弁別の特徴、内的性質より外的に感じられる特徴などが重要である。

ナヴァホ族は、薬草の効能と用法を多数多様な考え方で説明する。この植物は、より大きな薬効をもつある別の薬草のそばに生えるからとか、その草のある部分が人体のある部分に似ているからとか、その植物の匂いが（または触感が、味が）「申し分ない」からとか、その植物は水に「申し分ない」色をつけるからとか、その植物はある動物に関係がある（食物になる、または接触する、または生育場所と棲息場所が同じである）とか、神様がお示しになったからとか、誰々がその使い方を教えたからとか、雷が落ちた樹木のそばで摘んだからとか、ある病気にきいたので他の類似の病気もしくは同じ器官の別の病気にもきく、など。ハヌノー族の植物名では、葉の形、色、生育地、高さ、大きさ、性、生長の型、寄生動物、生長時期、味、匂い、などで分類される。<sup>(28)</sup>

#### 4. 分類の論理

組織化された社会はそれぞれ、必然的に、その成員である人間だけでなく事物や動物をも分類する。分類は、外形によることもあれば、心的特徴によることもあるし、また食物としての、土地としての、あるいは工作上、生産上、消費上の効用によることもある。トーテミズムを構成する動物体系や宇宙論体系や職業体系（カースト）などの分類体系のうち、どれかが他の体系に先行すると考える理由は何も見当たらない。トーテミズムを持たぬ民族も分類体系をもっており、それがやはり一般社会組織の基本的要素となり、またその資格において呪術的宗教的制度や非宗教的制度に反作用を及ぼしているからである。方位の体系、中国やペルシャの陰陽思想、アッシリアとバビロニアの宇宙論、いわゆる呪術的交感体系などがその例である。<sup>(29)</sup>

五行による分類と関係づけによると、肝病を患ったひとは、同じ「木」に属する麻、すもも、犬、ニラを食べるのがよい。しかし、脾病のひとはそれを口にしてはならない。<sup>(30)</sup>

生薬を見るとき一年のいつの時期に収穫するか、暑い夏であればそれは五行の薬性の寒に分類される。冬であれば温である。また、その名前のいわれが記載してあるものがある。たとえばアケビ、秋に茎を採取し、輪切りにして乾燥させ使用する。利尿、通経のため用いられる。アケビは別名、木通という、アケビのつるを切って吹いたり吸ったりすると、ストローのように空気が通る。また、山女、山姫ともいう、これは開いた実を女性の外陰部にたとえたものである。このように外形的なメタファーが薬効に結びついている。<sup>(31)</sup>

分類体系は社会の基本要素であり、それなくして社会は成立しえない。種オペレーターとしていろいろな分野を分類図式の中に組み込みうるのである。一方では普遍化によって初期の集合のある分野へ進出したり、特殊化によって、個別化にまで延長したりするのである。

ここでレヴィ＝ストロースは普遍化の一例として病気や薬の組織化を紹介している。

合衆国の南東部のインディアンは病理的現象を人間と動物と植物の間の争いの結果生ずるものとする。人間に対して腹を立てた動物は病気を送り込む。植物は人間の味方なので、薬を供給して応戦する。大切なのは、動植物の種それぞれが一つの病気もしくは薬をもっていることである。たとえば、チッカソー族によれば、胃病と足の痛みは蛇からくる。嘔吐は犬、顎の痛みは鹿など。同じ信仰がアリゾナのピマ族にもある。喉の痛みは穴熊、熱は熊、リウマチはツノトカゲのせいにする。ツノトカゲについてかれは興味深い「注」を記述している。アメリカンディアンと中国人とが、おそらく同じ行動を見て全く違った連想をしていることである。中国人は、ツノトカゲの肉やそれを浸した酒に催淫効果があると考えている。交尾のとき雄は雌を非常に強く抱きしめ、その状態で捕獲しても雌を話そうとしないからである。<sup>(32)</sup>

種は、象徴体系の中で、いろいろ異なった多数の機能を果たすことができ、それらの機能のうちいくらかのものだけが実際に利用されるのである。これらさまざまな可能性の全容はわれわれにはわからない。いまでは民族誌のデータは参照できない。

レヴィ＝ストロースの注は動物の生態をどのように解釈するかは文化によって違うが、その薬としての効用はメタファー的である。その中

国文化から生まれた漢方薬で同じような効用をもつ生薬を次に紹介する。すべて動物生薬である。精力剤だけでは偏りがあるとも考えられるが、全般的に気を充実させる、健康を保つ生薬とみなすこともできる。効用は動物の生態のメタファー的なつながりであり、植物の生薬からは出てこない。

蛤介（オオヤモリのオス・メス）<sup>(33)</sup>

雄・雌一対で、といえ、直ちに精力剤を想像する。このヤモリは精力絶倫で幾日かに渡って交尾を続けるという。男性ホルモン作用があり、エキスはマウスに催淫作用をおこし交尾期を延長し、去勢マウスにも催淫作用を示す。子宮、卵巢の重量も増加する。漢薬としての応用は幾分異なる。肺を補い、また腎を温め、腎虚、喘逆を治す。このため気管支喘息、心臓喘息、肺結核、神経衰弱、頻尿、老人の足膝萎弱などに応用される。強精作用は腎を温める働きによるものである。精力絶倫の生態や不気味な形態から精力剤に利用されたと思われる。

麝香（ジャコウ鹿の分泌物）

麝香はジャコウ鹿の雄が雌を呼ぶため交尾期に発散する香りなので媚薬としても用いられた。芳香成分はケトン体で他に男性ホルモン様作用を呈する物質を多数含む。中枢神経、とくに呼吸中枢および心臓を興奮させる。家兎に対して血圧降下作用。去勢鶏冠に塗布すると、男性ホルモン様作用のため増大する。

鹿茸（マンシュウ鹿の幼角）

鹿茸は血、肉の精であって、能く人の陽を養い、腎命を補い、骨を堅くし、髓を補い、精を益し、血を養うと言われ、強壯、強精、鎮痛薬として、インポテンツ、耳鳴り、腰膝の萎弱、虚寒証の帯下、慢性病の虚損などに応用される。主成分はコラーゲンなので他の動物の角で

もよさそうな気がする。実際、トナカイの角で行われた研究がある。

#### 海馬（タツノオトシゴ）

「龍」というのは空想上の動物だが、タツノオトシゴを見ているとこれがモデルになっていることが容易に想像できる。生薬名は「海馬」といい頭が馬に似て海に棲息することから名づけられている。男性ホルモン作用がある。海馬エキスはマウスの実験で交尾期を延長し交尾休止期を短縮する。また去勢マウスで交尾期が再現し、メスでは子宮、卵巣の重量も増加する。このことから強壯剤として、老人、虚弱者の精力減退、精神衰弱に、又鎮痛剤として腹痛にも用いる。

瀉血療法としてその効用がすでに知られたものが違うかたちとして生薬として使われているものもある。効用もヒルが止血しないということで、血の流れを良くする生薬として使われている。これもメタファー的な使用である。

#### 水蛭（ウマビル）

ヒルはヨーロッパで古くから薬用として使われ、1929年までは各国の薬局方に収載されていた。生きているヒルを患部の皮膚に吸い付け血液を吸収させる瀉血療法に用い、主に脳溢血、急性緑色色盲、角膜疼痛に応用された。打撲などの内出血で暗紫色になった部分にヒルを置いて吸着させると正常な皮膚の色に回復する。ヒルの唾液は抗凝血作用があるため、ヒルが離れた後の血はしばらく止血しない。このような観察から薬として利用されるに至ったものと考えられる。この血液凝固抑制と溶血作用から血病を治す要薬として応用する。

#### 虻虫（アブ）

ヒルが血を吸うならアブも吸う。ならば同様な働きは備えているヒルと同じような病態に使

う。牛馬の血を吸うが人も刺す。これを採集するのは血を吸ったものが好ましいといわれる。日乾か陰乾し、頭、脚、翅を取り除き、生のままか炒って用いる。有効成分は未詳だがアルコールや水性エキスには血液凝固阻止作用や溶血作用がある。駆瘀血薬として用いる。

#### 全蝎（キョクトウサソリ）

サソリ毒は蛋白質で一種の麻酔毒といわれている。薬物で痙攣を誘発したマウスに投与して痙攣抑制効果が認められた。また血管運動中枢を抑制することによる血圧降下作用、鎮静作用がある。しかし、サソリ毒は血管を収縮し、心臓を興奮させ、血圧を上昇させる。毒蛇の神経毒と類似しているが作用は一時的である。蛋白質なので内服では胃酸により失活する。鎮痙薬として、ひきつけ、破傷風などに、鎮痛薬として、関節痛、頭痛、瘡腫に、解毒散結の効があるので瘡瘍腫痛にも用いる。

毒は神話的思考の中にもかなり出てくる。「自然と文化のあいだで、毒がある種の短絡を起こしている。自然の物質が自然の物質のまま、狩とか漁という文化的活動に介入し、その活動を極度に簡単にする。毒は人間と人間の所有する通常の手段より格段に優れており、人間の行為を増幅し、結果を先取りし、より早く作用し、より大きな効率を上げる。先住民が、毒は文化への自然の闖入であると考えていたことということは理解できる。自然が一時的に文化に乱入する。自然と文化の取り分の見分けがつかなくなる。先住民の哲学を正しく理解しているならば、毒の使用は自然に属するものから直接生ずる文化的行為ということになる。」<sup>(34)</sup>

毒は治療という文化的活動にも介入、それを容易にする。自然が一時的に文化に乱入する。自然と文化の取り分の見分けがつかなくなる。

という。レヴィ＝ストロースは自然と文化の二分法を操作概念としてよく使うが、伝統医学の場合は、この二分法はほとんど出てこない。身体も生薬も自然に属している。

伝統医学の生薬はなぜこれが薬として発見されたか、時間を遡ることは不可能であるが、具体の科学の基本である、自然の認識による分類、感覚的なものによる分類から考えてみると、かなり簡明な論理が見えてくる。生薬には薬味（五行説による酸、苦、甘、辛、鹹 [塩辛い]）、薬性（温、微温、平、微寒、寒）がある。

例えば、患者の熱を抑える作用のある生薬の性は寒性であり、冷えの症状を改善する生薬の性は温性である。寒性の生薬は体を冷やし、消炎・鎮静作用があり、温性の生薬は体を温め、興奮作用がある。

味とは薬の味のことで「酸・苦・甘・辛・鹹」の5種類に分かれる。この5つの味は内臓とも関連があり、次のような性質がある。<sup>(35)</sup>

「酸」（酸味）＝収縮・固渋作用があり、肝に作用する。

「苦」（苦味）＝熱をとって固める作用があり、心に作用する。

「甘」（甘味）＝緊張緩和・滋養強壮作用があり、脾に作用する。

「辛」（辛味）＝体を温め、発散作用があり、肺に作用する。

「鹹」（塩味）＝しこりを和らげる軟化作用があり、腎に作用する。

薬性は感覚的にはわからないが、苦味には寒性があり、酸は微寒、甘性は平、塩辛いのは微温、辛味は温である。味から判断することになる。しかし、その産地（熱帯地域かどうか）、収穫の時期（春夏秋冬）からある程度判断できる。

たとえば、生薬でも有名なウコンを例に挙げてみよう。ターメリックとしてカレーのスパイスとしても常用されている。熱帯アジアで採れるショウガ科の多年草である。薬味は辛苦、薬性は微寒である。薬効は利胆（胆汁分泌を促し、脂肪の消化・吸収を助ける）、健胃、消炎、止血などである。熱帯の産であることから、熱をとる効果がやはり入っている。

陳皮は日本でもよく見られるミカンの皮を干したものである。ミカンは冬の食べ物である。ほとんどの果物が暑い時期なのに対し、ミカンは寒い時期に食べる。薬性はやはり温であり、薬味は辛苦である。健胃、利尿、鎮咳などの効果がある。

西洋医学的に病気と薬の関係は、熱や痛みなどの症状が出て、診断を受け、病名を決め、このような病気になったから、それに対応する薬を服用するというものである。

漢方などの薬はそうではなく、食事と同じように、これがおいしいから、自分の体質に合うからと、処方薬が先に来る場合がある。

「漢方は症状に応じたオーダーメイドの医療ということができる。その人にあった薬をトライアンドエラーで捜していく。その過程で当然、患者の様子を見たり、カウンセリングをしたりといったことが必要になる。だいたい、漢方では症状、病名を決めるのに薬の名前で決めていくのだそうだ。たとえば、これは葛根湯の症状だ。といった具合。薬を処方してみて、それがうまくマッチするかどうかで病状が判断されるのだ。インタラクティブな相互作用によって現象を特定していくというのは、合理的な思考法というよりシステム的な思考法、弁証法的な思考法といえるだろう。すべてのものはつながっているという一元論的な見方でもあ

る。』<sup>(36)</sup>

トータムの分類の論理、自然種による分類、抽象的分類にしてももっとも単純な体系である二項対立によって成立していることが多い。このように弁別性を際立て、それを薬効にも関係づけている。分類にしても動物の生葉のようにメタファー的な関連性、季節の温暖、味の五感などが基準になっている。当然それは文化によって、生態学的位置によって違うだろう。まずそれから人間は出発して、漢方のように薬効が確かめられてきたのである。

漢方に相對すると、病気とは何か、それを薬で治療するとはなにかを考えさせられる。漢方の処方病気に対して柔らかい、近代医学から見れば効果がない、治療しようとしてないと見える。漢方薬には上中下の三品分類がある。上薬は寿命を養う、下薬は病気を治す、しかし毒が多い、長期には服用できない。近代医学の化学合成薬はこの下薬であろう。

漢方薬の特徴は病気を治すことではない。少なくとも対処療法には向かない。西洋薬のような解熱剤は漢方にはない。一方的に熱を下げることは寿命にとってもよくない。バランス良く熱を下げる漢方薬はある。葛根湯のようになんでも効くというのがその特徴なのである。頭痛、肩こり、風邪、蕁麻疹などに効果がある。ただし誰でも効くことはない。体質が重要であり、自分の体質をよく知って使うのがよいである。

[注]

- (1) レヴィ=ストロース、C. (大橋保夫訳)、1976、野生の思考、みすず書房、p.23-24
- (2) 河本英夫、2008、構造とシステム、思想、12月号、p.128

- (3) レヴィ=ストロース、p.28
- (4) 同上。P. 26
- (5) 安富歩、2006、記号の身体性、渡辺公三他編「レヴィ=ストロース、神話論理の森へ」、みすず書房、p.207
- (6) 以上のMark Johnsonの認知意味論のイメージ図式の説明は、中村雅之、1992、意味の身体化—メルロ=ポンティと認知意味論—、大阪大学人間科学部紀要18、pp.35-37 によっている。
- (7) フーコー、M. (神谷美恵子訳)、1969、臨床医学の誕生、みすず書房、p.132
- (8) 同上、pp.127-128
- (9) 同上、pp.130-137
- (10) 織田啓成、1999、漢方医学概論、たにぐち書店、pp.44-47
- (11) 下田哲也、2003、漢方の診察室、平凡社、p.51
- (12) 劉燕池、宋天淋、張瑞馥、董連榮、(浅川要監訳)、1997、詳解中医学基礎理論、東洋学術出版社、pp.315-317
- (13) レヴィ=ストロース、p.27
- (14) 同上、p.21
- (15) 同上、pp.108-109
- (16) 同上、p.16
- (17) 同上、pp.18-19
- (18) 山田慶兒、1999、中国医学はいかにつくられたか、岩波書店、p.6
- (19) 同上、p.7
- (20) 中井久夫、2007、こんなとき私はどうして来たか、医学書院、p.165
- (21) レヴィ=ストロース、p.5
- (22) 同上、p.19
- (23) 同上、p.13
- (24) 同上、p.16
- (25) 同上、pp.19-20
- (26) 同上、p.20

- (27) 同上、p.20
- (28) 同上、p.74
- (29) 同上、p.193
- (30) 山田、前掲書、p.114
- (31) 原島広至、2007、生薬単、NTS、p.6
- (32) レヴィ=ストロース、p.196
- (33) 以下の動物の生薬については  
<http://ww7.tiki.ne.jp/~onshin/>
- (34) レヴィ=ストロース、C. 2006、神話論理 I 生の  
ものと火を通したもの、みすず書房、pp.388-389
- (35) <http://www.halph.gr.jp/info-kampo/index.html>
- (36) [http://homepage3.nifty.com/TENMA/book/  
book0992.htm](http://homepage3.nifty.com/TENMA/book/book0992.htm)